

## 転帰先による回復期リハビリテーション病棟の在棟日数の違いについて

### － 自宅退院と施設入所－

中島崇暁<sup>1)</sup>、風晴俊之<sup>1)</sup>、美原盤<sup>2)</sup>

1) 脳血管研究所美原記念病院 リハビリテーション科

2) 脳血管研究所美原記念病院 神経内科

**[はじめに]**回復期リハビリテーション(リハビリ)病棟の在棟日数に関しては、自宅退院者は家屋評価や家族指導など、在宅復帰のための準備に期間を要す。一方、施設転帰者は転帰先調整があるため、在棟日数が長い印象を持つ。そこで、自宅退院者と施設入所者の回復期リハビリ病棟の在棟日数について調査した。

**[対象・方法]**平成22年4月から平成25年3月の期間、当院回復期リハビリ病棟に入院していた脳卒中患者のうち、病前ADLが自立し、自宅で生活していた患者757名を対象とした。なお、入院中に状態が悪化した患者、死亡患者、転院患者は除外した。転帰先により、自宅群630例、および施設群127例に分類した。さらに回復期リハビリ病棟入棟時のFunctional Independence Measure点数により40点以下を重度障害、41点から80点までを中等度障害、81点以上を軽度障害に分類し、ADLの重症度ごとに自宅群と施設群の在棟日数を調査した。

**[結果]**重度障害患者は、自宅群が $85.0 \pm 24.8$ 日、施設群は $71.0 \pm 25.3$ 日で、自宅群が有意に長かった( $p < 0.05$ )。中等度障害患者は自宅群が $72.1 \pm 25.2$ 日、施設群が $72.2 \pm 24.7$ 日で有意差を認めなかった。軽度障害患者は、自宅群が $36.1 \pm 21.2$ 日、施設群は $49.8 \pm 19.5$ 日で、施設群が有意に長かった( $p < 0.05$ )。

**[考察]**重度障害患者の在棟期間について、施設入所者と比較して自宅退院の方が長かったことは、家屋改修や家族への介助指導などに多くの時間を要することが改めて確認された。一方、軽度障害患者において施設入所者の在棟期間が長かったことは、患者の状態よりも、受け入れ施設側との退院調整が影響すると思われた。在棟期間は、転帰先や環境調整に起因することが示唆され、このことを踏まえ早期から調整を行うことが在棟日数の短縮に繋がると思われた。